

松本清張

# 迷走地 図下

新潮社

新潮社

# 迷走地図

下



めいそうちず  
迷走地図 下

昭和58年8月5日発行

昭和58年10月25日11刷

著者 まつもと せい ちょう  
松本清張

発行者 佐藤 亮一

発行所 新潮社

東京都新宿区矢来町71 〒162

電話業務部(03)266-5111

編集部(03)266-5411

振替東京4-808番

印刷 二光印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

© Seicho Matsumoto, 1983 Printed in Japan

定価 1200円

乱丁、落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-320417-6 C0093

# 目次

|         |     |
|---------|-----|
| 貸金庫     | 5   |
| 速記文字    | 29  |
| 成田にて    | 50  |
| 死者の始末   | 75  |
| かたづけ    | 96  |
| チリの死    | 118 |
| 恋情      | 135 |
| 秘密の力学   | 157 |
| 解剖所見    | 177 |
| 「釣り」の技巧 | 194 |
| かくし場所   | 213 |
| 窮       | 234 |
| 神経加圧    | 254 |
| 「嘘よ」    | 275 |
| 予兆      | 290 |
| 総裁譲渡の前  | 310 |
| 犯行宣言    | 332 |
| こともなし   | 353 |

装  
画  
滝  
野  
晴  
夫

迷走地圖下



## 貸金庫

土井信行は、タクシーで浅草三丁目に向った。雨の日の午前十一時ごろだった。

ホテルの部屋で受けた外浦卓郎の電話による番地をタクシーの運転手に云ったのだが、この運転手は浅草の地理に不案内とみえて、碁盤の目になった町をうろうろと走りまわった。

言問通りを北に入ったこの界限はスナックバーと小料理屋とがやたらと眼につく。あいだあいだに普通の商店や小さなビルもはさまっているが、風俗営業は料亭を中心に集っていた。

その料亭も一カ所にはかたまらずに、とびとびに一軒か二軒ずつ散在していた。どれもがあまり大きくなかった。

土井が運転手に渡したメモは、「浅草三丁目××番地、桐の家」というのだが、これがわからない。午前十一時という時間はこうした町では半分眠りからさめてない状態で、スナックバーも飲み屋もトルコもまだ表を開けてなかった。ほかの料亭は玄関も勝手口も戸を閉めていて、訊ねようがなかった。浅草三丁目は言問通りを隔てて、浅草寺の裏、奥山と対い合う。

お好み焼屋、手焼き煎餅屋、すし屋、「うどんすき」屋、しるこ屋などに運転手が訊いても、知らねえな、とそっけなかった。

山の手を専門にしているタクシー運転手は、異邦の土地に足を踏み入れたようで半泣き顔だった。



た。

けつきよく方眼紙形の町を、電形に縫<sup>い</sup>つて車を走らせたのが正攻法で、ようやくのことに該当の番地に出ることができた。

それまで途中に芸妓専用のカツラ屋があつたり、「小唄稽古所」があつたり、「京染専門」の店があつたりするのは、さすが土地柄であつた。

「桐の家」は小さな待合であつた。背景にアパートがあつたりして、この家の塀の中から一本のしだれ柳が出ていなければなら、普通のしもたやとそう変りはなかつた。

もつとも、そのまわりには、スナックバー「シャガール」「ハイドン」「しんちゃん」「さち子」「京洛」「杏花」、小料理屋の「追分」「竹むら」「正直亭」「若芽」などの看板がならんでいて、

それだけに粹づくりの古い家屋がくろずんでいた。しだれ柳だけが新緑色に冴えていて、

外浦卓郎ともあろう男が、こんな佻しい待合を使うのかと土井は一瞬眼を凝らしたが、番地も名前も間違いなかつた。

表の格子戸はまだ閉め切つてあり、玄関前の飛び石には水も打つてなかつた。

土井はボタンを押した。

玄関の格子戸が細目に開いて、女の眼が中からのぞいた。

土井が言葉を出さない前に格子戸がいつぱいに開き、いらつしやいませ、外浦さんがお待ちかねでございます、と腰をかがめたのは、三十四、五くらいの女中だつた。

玄関を上つたすぐ横が階段で、二階に上つた廊下の右手の襖に女中は手をかけた。そこは四畳半の控えの間で、女中は仕切りの襖の前に膝を突いて、

「お見えになりました」

と奥へ声をかけた。

「どうぞ」

さぞかしマイクによく乗ると思われるような太い徹る声が土井の知る外浦の特徴だったが、この、どうぞ、という答えには、声の囁ささめがあった。

襖を開けると、正面の床柱を背にして外浦卓郎が、料理の小皿を乗せた朱塗りの座卓の前に坐っていた。

土井は外浦の顔を見た瞬間、ああこの人は疲れているな、と思った。襖越しの声といい、顔の表情といい、外浦の疲労を直感した。

最初に来た感じが、正確なことがある。だんだん話し合っているうちに相手の表情も声も普通になってきて、何とも思わなくなるものだが、あとで考えてみて、やはり最初の瞬間の印象が正しかったと知ることが多い。

外浦とはOホテルの宴会場ロビーで偶然に遇つて以来である。土井は「川村正明君を励ます会」の入口の列にならび、外浦はどこやらの結婚披露宴に列するとかで礼服装で客溜りに居た。いま会うのが二カ月ぶりというせいもあって、さっきの直感になったのである。

「やあ、ようこそ」

外浦はそこから土井に声をかけた。

「忙しいところをお呼び立てして済まなかったな」

「おそくなりました」

土井は畳に膝を揃えて、先輩に挨拶した。

「ちよつと道がわからなかったものですから、タクシーが迷いました」

「そうでしょう。お初めてのお方はたいいていそうなんです。小さなうちなものですか

ら。申しわけありません」  
女中が引きとって云い、

「どうぞ」

と、用意の座布団の上へすすめた。外浦と真向いだった。

座敷は十畳ぐらいであった。天井板も欄間も柱も桐油とうゆを塗ったように古い色をしていた。窓ぎわの障子から午後の明るい光線が流れていた。

まずビールで雑談となった。東大法学部の先輩後輩の間である。年齢が十年以上違う。それに外浦は卒業だが、土井は中途退学した。昭和四十三、四十四年の東大紛争では全共闘に属して活動し、三回逮捕された。

が、いま二人の雑談にその話は出ない。外浦からは、彼が現在仕えている寺西正毅のことも、それを中心にした政界の話もなかった。当りさわりのない世間話である。

土井からすれば、なぜ外浦が自分をここに呼んだのかまだわからない。十三、四年前、まだ外浦が経済新聞社に居るころ、何度か彼の話を聞きに行ったことはあるが、外浦が東方開発の社長和久宏に引張られてその秘書となつていらい足踏みしなくなった。和久宏は、いわゆる財界の世話役であった。

その後、外浦卓郎は寺西正毅の私設秘書となった。寺西が外浦を和久宏に懇請して「借り受けた」という風聞であった。これが成功したとき、寺西夫妻が揃つて和久邸を訪問し、厚く礼を述べたというのだ。

現在の仕事に入った土井は、永田町付近でときに外浦の姿をよそながら見かけることがあったが、それもいわば路上の目撃にすぎず、土井から進んで外浦に近づいて挨拶するようなことはなかった。土井には、かつての全共闘運動に挫折した過去のみならず、現在保守党議員らのゴース

ライターをして「身を売っている」という「裏切者」にも似た自己屈辱があつた。

この前、Oホテルの宴会場ロビーで、「川村正明君を励ます会」の列にならんでいる土井を見つけた外浦が、結婚披露宴の客の輪から抜けて歩み寄り、

（やあ、しばらく）

と声をかけてきたのは、土井には思いがけないことであつた。

（もう何年になる？）

外浦は笑顔で土井に訊いた。

（十三、四年にはなると思いますが、ご無沙汰しています）

（もうそんなになるかね。きみは變つてませんね）

（外浦さんこそ以前のままです。前よりはお肥りになったようですが）

最近の外浦をよそながら見ている土井だったが、挨拶してないので、これは社交的な言辞になつた。

（そのうち、久しぶりに話したいものだね）

（でも、外浦さんはお忙しいんでしょう？）

（いや、そうでもないよ、電話をくれたらいい）

その場の言葉だけと思つていたが、久しぶりに話したいというのが今日の實際になつた。しかも外浦のほうから電話をくれて、ここへ呼び出されたのである。

料理が次々に運ばれてきた。二人はビールを酌み合つた。

外浦は雑談をつづける。ここへ呼んだ彼の目的が土井にはまだわからない。そのうち、久しぶりに話したいものだね、といった彼の言葉どおりに、久闊きうくわつを叙す雑談だけで終始するのだろう。女中一人がそこに付き切りで坐つていて、ビールを注いだり、料理の皿をならべたりしてい

た。

「この前の〇ホテルでの川村代議士の会はなかなか盛会だったようだね。きみも出席した会だ  
が」

雑談だったが、世間話でもなかった。

「はあ、相当盛会でした」

土井はなんとなく眼を伏せて答えた。

「上山庄平さんが代表世話人になっている『革新クラブ』のヤング・パワー議員さんたちは、なかなか活発じゃないか」

「はあ」

土井は外浦に「革新クラブ」をどう思いますか、と訊きたかったが、川村正明のスピーチの原稿は自分が代って書いた気遅れから、それが口にできなかった。

外浦は、きみはいまどんなことをやっているのかとはまだ訊いてこなかった。寺西の秘書をしていて、永田町界隈の情報に通じている外浦のことだから、何をしているかぐらいは耳にしているだろうと土井は思った。げんに自分の仕事のことを外浦が質問しないのはその証拠のように思われた。

とすれば、そんなことを問えば後輩の心を傷つけるという外浦の思いやりかと土井は思った。そういえばいまの外浦は始終明るい笑顔と快活な話しかたで対してくれているのである。

——その顔には、ここへ入ってきた瞬間に受けた外浦の疲れた声も表情も消えていた。相對して話しているうちに、「馴れ」が出てきて、べつだんのことでも感じなくなつたせいかもしれなかった。

「ぼくは、川村正明さんの会に出た友人から聞いたんだがね。あの会では板倉退介先生がたいへ

んなご機嫌だったそう。板倉派の幹部どころが総出で、上山さんの張り切りようたならなかった、と云っていたが、そうだったかね？」

これは外浦が他派閥の「情報」をとるのでは決してなかった。そんな必要は少しもないのだ。板倉派は党内第三位の勢力で、人数が最も少い。とくに上山らの新グループが板倉派から「突出」していて、いつ板倉派から分離するかわからないといわれている。板倉退介はじめ同派の幹部が若い二世議員の川村正明の会に出たのも、その分裂を喰い止める策とも噂されているくらいだ。次期首班の「禅譲」が確定している寺西正毅の秘書が、少数派の動向を気にすることは何もなかった。

外浦卓郎の口から「川村正明君を励ます会」の話が出たのも、土井から情報をとるというのではなく、世間話の一つにすぎなかった。

「これもその会に出ていた人の話だけだね」

外浦は、にこにこして云った。

「川村さんのスピーチがとてもよかった、というんだな。近ごろの若い議員さんは演説がうまいと賞めていたよ」

土井は下をむいた。

外浦はどこまで知っているのだろうか。知っていてトボケているのか、ほんとに知らないで云っているのか。

土井は、一瞬、眼を外浦の顔に走らせたが、外浦はただ陶然とした表情だった。――

（今日の日本の政治を引張って行っているのは、どういう人たちでしょうか。それはひとにぎりの恍惚の老人たちです。老衰によって脳が軟化し、外界への認識、理解などに障害が起ることです。老政治家の恍惚とは、自己への己惚れ、もしくは自己の置かれた環境への己惚

れという独特のナルシズムであります。すべてが自己個人本位に立つ己惚れでありまして世界動向の中で日本がどのような立場になっているかは、いっこうに認識がないのであります。老衰せる脳の後頭葉、すでに枯死せる視覚、知覚、認識、理解力。しかして肥大せる前頭葉にある生存欲、所有欲、自己顕示欲の年寄の政治家に、日本を任せてよいでしょうか。断じて否であります。われわれ若い行動派が改革を行わなければならないが、もう改革というナマぬるいものではなく、革命といった思い切った手術が必要であります。われわれは新右翼ではありません。あくまでも国民本位の国民主義であります。いわゆる民族主義とも違います。日本のため、一億の国民と共に歩くものでございます。……「励ます会」で川村正明のスピーチ)

それに重なつて、もう一つの文章が蘇つた。――

(東大闘争の現局面についての檄。――)

現在の日本における国立大学の総体的具現者である東京大学の制度、秩序、意識の徹底解体、破壊を東大闘争の根底にすえ、その過程における必然的媒体として、その思想的物理的表現として、鋼鉄の全学バリケードを構築すること、そして現在闘争に直接参加している二千余の学生、大学院生、助手、職員が、その全学バリケードを死守する決意を固めること、これのみが東大闘争の質的飛躍を保証し、未曾有の長期闘争の展望をきりひらく唯一の道である。大衆団交実現の圧力手段としての全学封鎖、貴族的、言語的、象徴的な全学封鎖と訣別し、今こそ鋼鉄の全学バリケードへ邁進する時がきた……

……場合によつては文・医学部をのこして授業再開にふみきろうとする大学当局の方針は、一月以来三〇〇日にわたつて闘う中で、文・医闘争を全学、全国の学園闘争のなかで位置づけ、深化させてきた全学共闘会議への真向からの挑戦である。これに対するわれわれの方針

もまた明白である。卒業問題を克服し、大学閉鎖の恫喝に屈せず、長期闘争を耐えぬく戦列の強化を直ちに開始することである。

諸君、重大決意をせよ！

七項目要求貫徹、東京大学解体へ向って一大長期戦争を展開せよ！

その必然的媒体としての鋼鉄の全学バリケードを築け！

——前者は土井信行が川村正明議員のために代作した「励ます会」でのスピーチ用原稿であり、後者は東大生のころ彼がガリ版でしきりと刷っていた「檄」の一つである。

前者の川村議員のスピーチと、後者の「全共闘」の東大宣言との間には十四年の年月の差がある。内容的にも一は保守勢力のために、一は十四年前に反体制の闘いであった。

この間に日本の情勢も、かつての「全共闘」の運動家も大きく変っている。かつての同志の中には「底辺の生活」を送っている者もあり、運動のことは口を拭って世俗的な「出世」の道を歩いている者もいる。

後者の種類には土井が入っている。ゴーストライターとして政憲党に手助けしている土井の悔恨であり、運動の挫折から階級を裏切ったという背信意識であり、また自虐でもあった。

外浦卓郎は学生時代からノンポリであり、卒業してからは新聞記者となり、財界世話役の和久宏の秘書となり、いまは寺西正毅の和久への要請によってその秘書となっている。いわば同じ保守勢力の中に巣くっているのだ、土井は外浦に対して気が楽なはずだが、「裏切り」の意識があるため、そして外浦が冷徹な第三者だけに、彼の心は萎縮した。

もっとも、外浦は土井にそのような窮屈なものを与える言葉や素振りを決して云ったり見せたりはしなかった。むしろ土井の心に怙屈きうくつとしたものを起させないように配慮しているふしがあった。すべてを知っているが知らぬ顔をされているというのは、これまた土井にとってつらいこと



であつた。

ふいと、外浦が傍の女中に微笑して云つた。

「ここは、ぼくらが勝手に飲むからいいですよ。料理だけを運んでください」

「はい」

女中はおじぎをして座敷を出ていった。

土井の心は緊張した。外浦は自分をここへ呼んだ用件を今から云い出すのである。

「土井君」

外浦は、座椅子に背をよりかかり、身体を斜めに崩した楽なかつこうで、なにか冗談を云い出すときの笑顔になった。

「こんど、ぼくは寺西先生の秘書を辞めることになったよ」

土井は眼を上げて外浦の顔を見つめた。嘘でしょう、と言葉が口から出かかったが、外浦の眼が笑つてないことと、自分をここへ呼んだ話がそれだとわかつて、声を呑み、

「それはまた……」

と、ようやく云つた。

「急なことですね」

「いや、急でもないよ。前から考えていたことだね」

理由は何か、と土井が訊ねる前に、外浦のほうから説明した。

「ぼくも寺西先生にお仕えして、もう三年になる。このへんが退きどきと思うんだ」

云つてビールを飲んだ。

その手もとを眺めて土井はきいた。